



北九州空港を核とした地域活性化策について



新聞報道によれば、国土交通省大阪航空局は 2 月 4 日、2018 年の管内空港の利用状況・速報値を発表し、北九州空港の旅客数は、過去最高の 174 万 9,962 人となりました。前年比 6.8%増で、離島を除き九州の空港では最も高い伸び率となったようです。

特に昨年 10 月台湾線が就航した国際線は、18.3%増の 32 万 5 千人となりました。また、昨年 6 月に全日本空輸が国際定期貨物便を就航させ、国際貨物取扱量は 3,671 トン、前年比 147.3%増と大幅な伸びを示しました。福岡県・北九州市・苅田町が連携し路線誘致などの努力の結果と考えます。

北九州空港の定期便は国内線が東京、名古屋、沖縄の 3 路線、国際線が釜山、ソウル、台北など 6 路線、また、成田、北九州、那覇を結び、0 時 45 分北九州空港を出発し、那覇を経由し、同日の 4 時 55 分から 9 時 20 分までには上海、香港、バンコク、シンガポール 4 都市へ到着する国際定期貨物便が就航しています。

このように、北九州空港は 24 時間空港であることの優位性を徐々に発揮しながら、特にこの数年は堅調に推移しています。

そこで、知事に何点か質問します。

- (1) 現在取り組んでいる福北リムジンバスの利用実績と効果並びに今後の方針についてお尋ねします。
- (2) 貨物便が定期就航しましたが、貨物取扱量拡大に向けた県としての取り組みをお尋ねします。
- (3) H31 年度暫定予算の中で、北九州空港の利用促進のため、海外の旅行会社による北九州空港国際線を活用した旅行商品の販売支援費 1,536 万 6 千円が計上されています。大変効果的な取り組みであると思います。

こうした取り組みにより、北九州空港を利用して国内外から北九州地域への訪問が期待されますが、北九州市は福岡市や北九州市と同様に海峡に面した函館市などと比較して、日帰り客が多く、市内消費額も福岡市の 3 割、函館市の 8 割程度です。

本州や四国とも近い地の利を活かし、九州のみにとらわれず、中四国を含めた観光ルートの開発を促進すべきと考えますが、知事の見解を伺います。

また、平成 23 年 9 月定例会にて、関門地域の観光推進にあたり、関係自治体等との連携強化と関門海峡のブランド化についてお尋ねしました。その後どのような取り組みがなされたのか、併せて今後の取り組みについてお尋ねします。

【知事の答弁】

福北リムジンバスについては、平成 26 年 11 月に策定した「福岡県の空港の将来構想」に掲げる福岡空港と北九州空港の役割分担と相互補完を進めるため、福岡空港では対応できない深夜・早朝便の利便性向上を目的として、平成 27 年 7 月から運行を開始した。

これまでの利用実績は、平成 30 年 12 月までの 3 年半で累計 3 万人を超えたが、1 便あたりの利用者数は、毎年徐々に増加してはいるものの、6.6 人とどまっている。

一方、昨年 10 月に実施した利用者に対するアンケートによると、7 割以上の方が、リムジンバスがない場合は北九州空港の深夜・早朝便を利用しなかったと答えており、福北リムジンバスによって福岡都市圏と首都圏とのアクセスの利便性の向上が図られ、深夜・早朝時間帯の北九州空港の利用促進につなが

っていると認識している。

福北リムジンバスを今後継続的に運行していくには、さらに利用者を増やしていく必要がある。このため、平成30年7月からは、直方、若宮、新宮など降車可能な停留所を増やし、利用機会の拡大を図ったところである。

また、機内広告やバスの車内広告、県による新聞、テレビ、ラジオなどの広報に加え、新たに設置した停留所沿線の市町のHPや広報誌などでも周知を行っているところである。

今後とも、航空会社やバス事業者、停留所周辺の市町と連携して、福北リムジンバスの周知を図り、更なる利用者増に向けて取り組んでいく。

昨年6月のANA(エィエヌエー)定期貨物便の就航により、24時間利用可能な特性を活かし、深夜に北九州空港を出発し、那覇空港を経由してアジア主要都市へ早朝に貨物を届けることができる迅速かつ安定的な物流ルートができた。

また、九州で唯一の貨物専用機による定期便であり、これまで福岡空港では搭載できずに、関西空港や成田空港へ陸送していた大型貨物等を、九州から直接空輸することができる体制ができたところである。

今後、北九州空港を発展させていくためには、貨物取扱量を拡大させていくことが重要である。

このため、北九州空港を利用する荷主や物流事業者に対する助成も活用して、大型貨物や農林水産物の利用も含め、ANA定期貨物便のさらなる利用促進に取り組むとともに、貨物チャーター便の誘致もあわせて進めていく。

昨年度、北九州、京築地域の市町と連携し、おすすめのモデルコースを開発するとともに、コース周辺の食や見どころを掲載したガイドブックを作成し、情報発信を行っている。

加えて、昨年度に、引き続き、北九州マラソンの開催にあわせ、「ぞっこん北九州・京築フェア」を実施し、県内外からの来場者に、観光ルートを紹介するとともに、グルメ、特産品、伝統文化など地域の魅力をPRしていく。

また、国内はもとより、自転車愛好家の多い「台湾」などからの誘客を促進するため、サイクルツーリズムにも取り組んでおり、



その広域モデルルートの一つとして、「門司港から上毛」のルートを決し、発信しているところである。さらに、中四国を含めた観光ルートとしては、この広域モデルルートを山口県まで繋げることが有効であると考えている。

昨年5月の九州地方知事会議、九州地域戦略会議において、各県知事、経済界に対し、県域を跨ぐルートの設定など九州、山口を挙げてサイクルツーリズムに取り組むことを提案した。

こうした取り組みを進めることにより、新たな観光ルートを開発し、北九州・京築地域への誘客を促進していく。

北九州市及び下関市は、共同して、これまで、観光パンフレットやマップの作成をしてきた。また、両市は、下関、門司港両港の沿岸部にレトロな街並みとして残る重厚な近代建築物群に加え、フグ料理やバナナの叩き売りといった食文化、風物詩を、「関門”ノスタルジック”海峡」として文化庁に申請し、日本遺産の認定を受けたところである。

現在、日本遺産の構成資産の一つであり、国の重要文化財でもある「門司港駅」の復原工事が進められており、3月10日にはグランドオープンの予定となっている。

引き続き、北九州市等と連携し、関門地域の魅力向上を図り、日本遺産として認定された「関門”ノスタルジック”海峡」、リニューアルする「門司港駅」や「関門海峡ミュージアム」などを活用し、同地域への誘客に努めていく。

【要望】

北九州空港を中心とした活性化について要望します。

サイクルツーリズムの取り組みについて答弁がありました。北九州空港の連絡橋はサイクリストにも人気があります。海外からの旅行者が、空港からそのまま自転車で移動できるように北九州空港で自転車の組み立てスペースの確保が有効のようです。限られた投資で可能と考えますのでぜひ検討をお願いします。また、少々先の話となりますが、下関北九州道路が決定し仮に橋となれば、自転車が走れるようになれば大きな観光資源となります。「関門ノスタルジック海峡」として認定を受けた日本遺産もしっかり活用しながら、北九州・京築地域の活性化を図って頂くことを期待して質問を終わります。